

市史編集だより

第7号

摂津市教育総務部生涯学習課市史編さん係

令和4年12月発行

〒566-0023 摂津市正雀4丁目9-25 摂津市民図書館内 TEL 06-6319-0587

摂津市最初の友好都市—蚌埠市の近代

◆友好交流のあゆみ

中国安徽省の北東部に位置する蚌埠市は摂津市が締結した最初の友好都市です。1972年9月に日中国交正常化がはかられ、1978年に日中平和友好条約が結ばれたのを契機として、両国間で都市単位の友好交流が盛んになっていきます。摂津市と蚌埠市の友好交流は1980年から始まり、84年5月5日に友好都市締結に調印しました。両市の友好都市締結は大阪府下では四番目、日本全国で見ても比較的早い段階のものです。



図1 「がんばる技術研修生」(『一衣帯水』第2号、1986)

翌年1985年9月に、当時の摂津市・蚌埠市友好推進協議会(摂津市国際交流協会の前身)が『一衣帯水』と命名した会報を発刊し、両市の生き生きとした友好交流活動の様子を紹介しました。「一衣帯水」は日中関係にもよく使われる熟語で、親密な近隣関係を意味する言葉です。友好都市締結以来、摂津市は蚌埠市と毎年互いに訪問団を組織し、市内企業・工場・農家などの視察、スポーツ親善試合、書道など伝統文化の披露・特産品の物販など、盛んな友好交流を積み重ねてきました。その中でも、1986年10月末より半年にわたって、蚌埠市からの技術研修生二人が市内のダイキン淀川製作所で工業技術の研修に励んでいたことは特筆に値します(『一衣帯水』第2号)。

ところが、日中国交正常化四十周年の節目に当たる2012年9月、ちょうど摂津市による蚌埠市友好親善訪問が無事終了した二か月後、日中関係が激変し、経済と文化交流全般が大きな打撃を受けました。その影響で、摂津市と蚌埠市との間でも翌年以降の友好交流活動が一旦途切れることになりました。2019年10月に、両市の代表者の間では久々の交流活動の再開に合意したが、その矢先に新型コロナウイルスのパンデミックが起これ、交流活動は再び中止・延期となりました。

今年の日中国交正常化の五十周年に当たり、両国の間では政府機関や民間団体によるさまざまな現地イベントとオンライン交流会が開催されています。これを機に、我々も久しぶりに海の向こうにある摂津市の近隣・蚌埠市に目を向けて見ましょう。

◆昔の蚌埠

蚌埠地域は長江デルタの西、中国の三番目の大河・淮河^{わいが}の中下流域に位置しており、かの有名な禹^う（中国古代伝説上の帝王、夏朝の創始者）の治水伝説のゆかりの地ともされています。「蚌埠」という地名は、古代の当該地域は淡水真珠貝の繁殖地であったため、真珠採り船が多く集まっており埠頭になったことから由来し、近代以前には「蚌埠集」とも呼ばれました（「安徽省各縣市名稱考釋」）。

先史から明代にわたる古代中国史の中で、蚌埠はその大半を鍾離^{しゅうり}県（前 223～1369、現鳳陽県臨淮鎮東故城）に属していました。明朝初年（1374）、もとの鍾離^{しゅうり}県域を包括する鳳陽^{ほうよう}県（現安徽省滁^{じょ}州^{しゅう}市所属、蚌埠市に隣接）が増設されることによって、蚌埠は鳳陽^{ほうよう}県に属することになりました。ところが 1911 年以降、本来は辺鄙な田舎であった蚌埠は一躍して近代都会になっていきます。

◆蚌埠市の成り立ち

近代の蚌埠は「列車に運ばれてきた都市」の典型として、津浦^{つぽ}鐵路（現北京から上海までつなぐ京滬^{けいこ}線^{せん}の一部）の開通によって新生した町です。

1908 年、清政府はドイツとイギリスから資金と技術力を借りて、天津から直隸省（現河北省）・山東省・江蘇省・安徽省を経て南京の浦口までつなぐ大規模な鉄道建設に乗り出しました。全体の工程の中でも、北側の黄河と南側の淮河を跨ぐ橋の建設は最も大きな工程でした。そのうち、淮河大鉄橋の建設場所については、イギリス人技師が検討を重ねた末、地勢と地質が一番適する蚌埠を選定しました。なおかつ、津浦^{つぽ}鐵路の駅^{えき}の場所を選定する際に、蒸気機関車の給炭・給水作業の利便性から、繁華街と離れた辺鄙な渡口であった蚌埠はむしろ立地的に最適とされ、蚌埠^{べいこう}駅の設置も決定されました。

淮河大鉄橋は全長約 553 メートル、高さ約 11 メートルの設計で、当時最も先進的な技術を駆使して 1909 年 11 月の起工からわずか一年半後の 1911 年 5 月に竣工しました。同年 10 月、ちょうど津浦^{つぽ}鐵路の南段が開通した矢先に辛亥革命が勃発し、早速軍事的重要性を示した蚌埠を巡って軍事衝突が起きました。翌年に津浦^{つぽ}鐵路全線が開通すると、蚌埠は南北を縦断する鉄道運輸の中継地としてますます重要性が増しました。特に、当時の蒸気機関車の速度では、補給なしで北京—南京間を走り通すことができなかつたため、蚌埠^{べいこう}駅で一晩停車して給炭・給水作業を行う必要もあり、蚌埠^{べいこう}は必然的に宿場町化していきます（『蚌埠市志』）。この宿場町としての性格によって、蚌埠は政治と軍事の要所として急速に発展し、激動の時代の中で幾度も勢力争いの舞台になっていきます。

1927 年に国民政府が南京に国府を作ったことによって、蚌埠は正に政治の中枢に直結する玄関口になりました。ところが 1937 年 7 月に日中戦争が全面的に勃発し、翌年 2 月に、日本軍の侵攻を阻止す

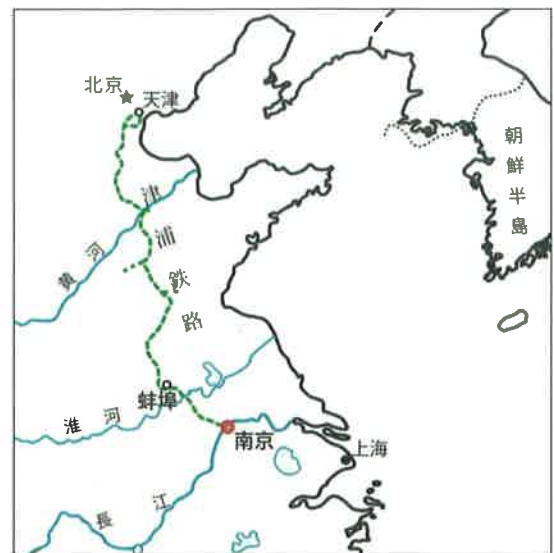


図 2 津浦鐵路略図

るために、国民軍が淮河大鉄橋を爆破しました。日本軍が蚌埠を占領した後、軍事的需要のため八か月余りをかけて大鉄橋を修復しました。それからの七年間、蚌埠は日本軍の占領下、安徽省の府庁所在地として一層近代化が進み、1945年に日本軍が中国から引き揚げた時点で、安徽省随一の都市になりました。

このように、蚌埠は戦争に翻弄されながら急速な近代化を遂げ、1947年には正式に市として設置され、行政において鳳陽県から離脱し、安徽省下最初の市制を歩み始めました。



図3 爆破された淮河大鉄橋の横を歩く日本軍
(『大美画報』第3号、1938)

◆日中友好展望

蚌埠市は正に日中関係史の光と影を背負いながら発展してきた代表的な近代都市です。1949年の中華人民共和国成立以降、蚌埠市は安徽省第一の工業基地になり、摂津市と友好交流を始めた80年代には全国的にもトップの経済産業力を誇る都市でした。摂津市との友好交流も、1990年代までは経済貿易関係がメインでしたが、2000年以降は文化・教育面での交流が増えていきます。



図4 摂津市・蚌埠市友好都市締結一周年記念大会(蚌埠市にて)

いままでの日中友好交流の中で、蚌埠市のような戦火の中で成立した中国近代都市の道程はあまり正面から取り上げてこられませんでした。より安定した平和を築いていくために、戦争という負の記憶を正しく認識することは肝要だと思われます。日中国交正常化から半世紀経ったいま、摂津市と蚌埠市も友好交流の再開に向けて相互理解を深め、共に平和な未来を築いていくように、心より願います。

(摂津市史編さん嘱託員 林潔)

参考資料

- ・ 摂津市国際交流協会『摂津市国際交流協会創立20周年記念』、2013年
- ・ 李玉铭、程堂义「一百多年前，津浦铁路的安徽“印记”」(『合肥晚报』2021年1月12日)
- ・ 贾铁成「淮河大铁桥的百年沧桑」(『淮河晨刊』2020年10月16日)

協力者：摂津市国際交流協会、許強氏(摂津市国際交流協会理事)

『新修摂津市史 第一巻 自然地理 先史・古代 中世編』出版のお知らせ

今年3月に、待望の『新修摂津市史 第一巻 自然地理 先史・古代 中世編』は出版されました。本巻は地理・考古学並びに日本古代史・中世史学の専門家が執筆陣となって、現摂津市域における自然環境の形成から中世までの地域史の展開を描いています。各学術分野の最新の研究成果と新出の史料を駆使した丹念な考察をもとに、分かりやすくまとめた一冊です。ぜひお住まいの地域の成り立ちを調べる上でご活用下さい。

監修者 市大樹（大阪大学大学院人文学研究科教授）、野田泰三（京都橘大学文学部教授）

《自然地理編》

- 第一章 摂津市の地勢と市街地形成
- 第二章 摂津市の気候
- 第三章 摂津市の地形と地質

《先史・古代編》

- 第一章 考古遺産が物語る北摂の先史時代
- 第二章 伝承の世界から史実へ
- 第三章 律令国家の形成と三島地域
- 第四章 律令国家の展開と三島地域

《中世編》

- 第一章 古代から中世への移行と三島地域
- 第二章 武家政権のはじまりと摂津市域
- 第三章 南北朝・室町時代の摂津市域
- 第四章 戦国・織豊時代の摂津市域



A5版 本編 922頁 定価 5,000円（税込） 発行：摂津市

【販売場所】摂津市史編さん室（お問合せ先参照）、摂津市生涯学習課（三島 1-1-1 市役所 6階）。

*郵送を希望される場合は、下記までお問合せください。

【お問合せ先】摂津市教育委員会教育総務部生涯学習課 市史編さん室

〒566-0023 大阪府摂津市正雀 4-9-25（摂津市民図書館内） 開室：火～金曜日 9時～17時

[TEL&FAX] 06-6319-0587 [Eメール] shishi-hensan@city.settsu.osaka.jp

★歴史・民俗資料調査にご協力を★

摂津市史編さん係では、引き続き市域の歴史・民俗にかかわる資料の収集・記録などの調査を行い、その成果を順次市民の皆さまに紹介する活動に取り組んでいます。

もしご自宅に古い（中世、江戸時代、明治・大正・昭和時代）①文書、②本・帳面・帳簿等の冊子、③写真、④広報紙・地方新聞、⑤民具などをお持ちでしたら、どうか捨ててしまわずに、市史編さん室までご一報下さい。